

主体的に学び合う複式教育

～学び合いの場を生み出すみとりと支援～

1. 研究テーマ設定の理由

複式学級では、少人数であることから一人一人の活動の場が十分確保され、発言の機会が多くなる。また、異学年の子どもたちから学ぶことができる。さらに、司会や記録など子どもたち主体で学習を進める技能や態度を身に付けやすい。

特に、複式学級の学びにおいては、間接指導^{*1}時に司会と記録を子どもたち自身が行い、自分たちで主体的に進めていくところに最大の特徴がある。主体的な学びが成立するには、学びの基本的な流れを確立させると同時に、子どもたちに授業を進める技能を身に付けさせることが必要だと考えている。また、学びの場では欠かせない表現力やコミュニケーション力を育成していきたい。

複式部では、学びの基本的な流れと授業を進める技能を以下のように考えている。

学びの基本的な流れ	授業を進める技能
①課題を確かめる ・疑問を明確にして課題とする ・学習目標を設定する ②見通す ・どのような学習活動が適切か ・授業の終盤ではどうなっていたいのか ③調べる、考える（ひとり学び） ・課題に対する自分の考えをまとめる ・考えを伝え合うための準備をする ④深める（ペア学習やグループ学習） ・考えを表出して伝え合う ・全体で吟味してより良い考えに高める ⑤まとめる ・学習目標を達成できたか ・どんなことがわかったか	司会者 ・学習活動の時間を適切に設定する ・発言、ミニボードの利用、ノートや具体物の提示など、発表の方法を指示する ・発言を受けて様々に聞き返す 記録者 ・学習活動や発言を短くまとめて記録する ・囲む、線で結ぶ、文字の色を変える フォロワー ^{*2} ・司会が滞った場合にアドバイスする ・記録の補助を行う ・相手に伝わりやすい発表方法を選択し、短くまとめて話す ・発言内容について考えながら最後まで聞く ・立場や考えを表情や頷きに表す

(1) 学校提案とかがわって

複式学級の学習形態は、学校提案の「学びをデザインする子どもたち」という研究主題と非常に親和性がある。主体的に学び合うことで、子どもたちが学びをデザインすることが自然な形でできると考えている。しかし、学習や授業の進行を、全て子どもたちに委ねるということではない。学び合う主体は子どもたちであるが、そこには、教師の学びに対する確かなみとりと支援が必要である。

学校提案のサブテーマは「課題意識の深化を通して」である。「この子は、どのようなことに興味や関心をもっているのか。」「どのようなことであれば主体的に追究できるのか。」といったことを教師がみとり、子どもの思考に寄り添いながら互いをつなぐ支援を行うことで、学び合いが生まれると考えている。また、課題解決に向かえるような単元構成・授業計画・教材提示を工夫して支援する必要がある。

そこで、複式部の研究テーマを「主体的に学び合う複式教育 ～学び合いの場を生み出すみとりと支援～」として研究を進めることにした。

また、子どもたちの課題意識を深化させるには、疑問を疑問として認識させ、表出させる必要がある。子どもたちは、ある対象に出合ったとき、経験や既習事項を通してある程度の理解・認識ができ

間接指導^{*1}…一方の学年に教師が指導しているとき、他方の学年の子どもたちに、自分たちだけで学習を進めさせること。

フォロワー^{*2}…司会者、記録者以外の授業に参加する子どもたち全員を指す。

る。しかし、視点を変えて対象を見ることで、「どうしてかな。」と新たな疑問がわくはずである。そんな疑問を表出させることで、解決に向かうコミュニケーションを生み、対象への認識を再構築する学びにつながれると考えている。

(2) 複式学級でめざす子ども像

複式学級では、自分たちで学び合い、学習を進めていく技能や態度が必要である。具体的には、「物事に働きかけ疑問をもつ」「疑問の中から課題や目標を明らかにする」「意見や立場の違いを認めながら協力する」「目標に向かって行動する」といったものである。

学習においては、「計画→実行→評価→改善」のサイクルを、複式学級での学びで実現できる子どもをめざしている。複式学級で主体的に学び合うには、学習を進める中で「自分たちの学びが学習目標から外れていないか」ということを常に認知することが求められる。また、「自分たちの学びが目標に向かって高まっているか」を認知できる力も育てたい。

2. 複式学級における「学びをデザインする子どもたち」

(1) 複式学級におけるみとりと支援

複式学級の授業は、少人数のため考えをまとめやすい環境にあるが、一人一人の考えに深く触れて違いを見出したり、深めたりしようとしなければ、それ以上の学びにつながりにくい。正解のみを求めたり、事実としてとらえたりするだけではなく、表現されていないものや考えの奥に隠れているものを探れるようになってほしい。そのため教師は、子どもたちの理解・認識・立場・考えの過程を丁寧に見とり、別の視点で対象に出合わせる・説明を求める・理由や考えの過程を表出させるなどの支援を行う必要がある。

しかし、複式学級では、間接指導時に子どもたちの考えを見とりにくい。そこで、子どもたちの考えを板書記録・ワークシート・ノートなどに残させることによってみとり、支援に活かす必要がある。

(2) 複式学級における課題意識の深化

	低学年	中学年	高学年
課題意識	他者との考え方の違いや自分の疑問を課題として捉えようとしている。	自分の疑問を見出し、新たな考えを生み出すための課題を設定しようとしている。	多様な考えの中から疑問を見出すとともに、価値の高い考えを生むための課題を設定しようとしている。

(3) 実践例

学びがデザインされたと考えられる授業実践を以下に示す。

●1年生算数「たしざん」の授業より

たしざんカード(被加数が5~9までの15枚)がそろっているか調べる活動のなかで、被加数・加数・答えの関係に気付かせたいと考えた。加数に目をつけてカードを並べたペアと、答えに目をつけてカードを並べたペアが、ホワイトボード上に自分たちの考えを再現した後の場面である。

教師：カードを貼れたかな？

さっきから「わかった」とか「気付いたこと」って言ってるから、聞かせて。

ひかり：この数字(被加数)がどんどん減っていくでしょ。

のぞみ：知ってます。それ、ひかり君が言おうとした。

ひかり：それと一緒に、階段みたいになっていて、カードが減っていった。

司会：他にありませんか？

さくら：あ、他にもあるよ。ここ(加数)をたてに見たら同じ数が並んでいる。



(たてに見ると、全部加数が2であることを発見)

子ども：どうということ？

さくら：私が言いたいことは、左の数(被加数)は減っていったけど、右の数(加数)は同じ数が並んでいるってこと。

カードを規則正しく並べることで、被加数・加数という新たな視点が生まれ、新たな課題を発見した場面である。また、「階段みたい」は前単元でも出てきた発言であり、既習事項が活かされていると感じた。

教師：ひかり君、(答えが見えている方のカードの)裏側が気になっているみたいだね。カードをひっくり返しに来て。

ひかりが、「あの裏側、どうなっているのかなあ。」とつぶやき、答えが見えているカードの裏側が気になっている様子だった。自分たちが考えた、答えに目をつけて並べたカードの方にあまり発見がなかったからだと思われる。「裏返す」という発言やつぶやきは、期待していたキーワードであった。もし発言がなければ、「裏側は気にならない？」と問いかけるつもりであった。

ひかり：(答えが10のカードをひっくり返していく)

さくら：(裏返した式の並びが)ぐちゃぐちゃやん。

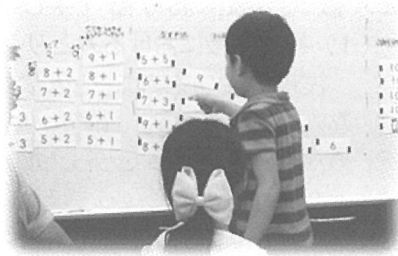
教師：並び替えると、わかりやすくないかな。

(5+5のカードを上貼る)

ひかり：(続きを並べていく)

子ども：足される数が増えていってる。

子ども：不足数が減っていってる。



ひかりの「カードを裏返す」という考えが、新しい題につながった場面である。

3. 研究の展望

学び合いの場を生み出すみとりと支援を充実させるため、以下の点を重要視して研究を進める。

①単元構成や課題を工夫する

子どもたちの多様な疑問や考えが引き出せるような単元構成や課題を工夫しなければならない。そのためには、子どもたちが興味や関心をもちやすい対象を準備する必要がある。子どもたちにつけたい力を明確にした上で、身近にある対象と深くかかわれるようにすることで、課題意識を深められると考えている。特に複式学級では、間接指導の時間が長いため、単元導入における子どもたちの課題意識に対する確かなみとりと支援が必要になる。

②「計画→実行→評価→改善」ができる子どもを育てる

子どもたちが主体的に学び合うためには、全員が課題解決のための見通しをもつことが必要だと考えている。そのため、単元導入時に子どもたちの課題を挙げさせたり、単元を通しての目標を立てさせたりするなど、単元全体の見通しをもてるようにしたい。1時間の授業では、学習計画を作成させるなどして課題解決のための過程に見通しをもたせたい。また、振り返りを大切にし、自分たちが選択した課題解決の方法は適切だったか自己評価し、改善できるように支援したい。そのため、子どもたちが互いの授業を参観し合うことで、客観的で子ども目線の評価と授業改善ができると考えている。

③授業における教師の出番を明確にする

間接指導時は、子どもたちが主体的に学び合い、学びをデザインできる時間である。しかし、子どもたちだけで学びの質を高めることは難しい。そこで、学習内容の価値を教師が十分理解し、子どもたちの実態をみとった上で、適切な発問や指示を出す必要がある。待つべきところは待つ、教えるべきところは教えるというように、1時間の授業における教師の出番を明確にして指導を行うことが大切だと考えている。

④学び方を学ばせる

子どもたちが主体となる複式授業では、子どもたち自身が司会や記録を行う。司会者には、授業

を進める技能だけではなく、発言をまとめたり、考えを引き出したりする技能が必要とされる。記録者には、フォロワーの発言を要約してわかりやすく板書する技能が必要とされる。考えを記録することで、互いの考えに触れやすくなるだけではなく、学びの足跡を残すことにもなる。フォロワーは、自分の考えを表出して伝える技術や話し合いを深めるための技術を身に付ける必要がある。さらに、司会者や記録者を助けながら授業を進めることも大切にさせたい。

子どもたちに学び方を学ばせるため、発達段階を考慮した目標を設定し、以下のような表を作成して指導に活かそうと考えている。

	低学年	中学年	高学年
学び方	教師の支援を受けながら学び方を知り、様々な学習形態を経験する。	教師の支援を参考にして課題解決に合った学び方を選択し、自分たちで学習を進める。	自分たちで課題解決に最適な学び方を選択し、学習を効率良く進めて学びを高める。
司会者	<ul style="list-style-type: none"> 司会の役割を自覚し、基本的な学習の流れに沿って進行する。 順番に意見を聞くなど、偏りなく指名する。 指示を出したり、発言を求めたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習課題に合った学習活動を選び、活動時間を設定して進行する。 同じ考えや違う考えを分類しながら指名する。 全体の様子を見て指示を出したり、発言を次につないだりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習課題によって臨機応変に対応し、適切な方法を選んで効率よく進行する。 相手の意見を受けて、関連付けながら指名する。 場の状況に合わせて個別の指示を出したり、発言をまとめたりする。
記録者	<ul style="list-style-type: none"> 適切な大きさの文字で単元名や発言内容を板書する。 大事なところを線で囲んで目立たせるなど、工夫して書く。 	<ul style="list-style-type: none"> 課題や学習活動など、大まかな学習の流れを板書する。 誰が発言したか分かるようにしたり、立場と理由を色で分けたりするなど、工夫して書く。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習活動や発言内容を分類して整然とまとめ、学習の流れを明確にして板書する。 反対意見や追加意見を効果的に書き加え、発言内容を線で囲んだり、矢印で関連性を示したりするなど、工夫して書く。
フォロワー	<ul style="list-style-type: none"> 相手の方を見て、聞きやすい声の大きさで自分の考えを話す。 話し手を見て、発言の最後まで聞く。 相手の意見との違いに触れながら適切な考えを見出そうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 相手との関連を挙げながら自分の立場を明確にし、理由をつけて話す。 話し手の考えを理解しようと努力し、表情に表したり頷いたりしながら聞く。 相手とともに新たな考えを生み出したり、深めたりしようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 相手の考えに触れたり、視点や論点を明確にしたりして、整理しながら話す。 話し手の意図を捉え、自分の考えと関連付け、考えを深めながら聞く。 相手と考えを伝え合い、より適切で価値の高い考えを生み出そうとするとともに、自分の考えの変容に気付く。

4. 研究の評価

授業の様子を記録したビデオ・音声・写真・ノート・ワークシートなどを用い、できるだけ詳細な授業記録を作成する。学び合いの場を生み出すみとりと支援がどのように成立していたかについて、その授業記録を「Aのようにみとり、Bのような支援を行うと、Cのように子どもたちの学びが高まった。」「Dと発問することで、子どもたちが主体的に学び合う姿が見られた。」のように分析して評価を行う。